

認知言語学的観点からの格助詞ヲ、二、デの意味構造とその習得

—中国語を母語とする日本語学習者を中心として—

森山 新

要 旨

本講演は中国語を母語とする日本語学習者の格助詞ヲ、二、デの意味構造が日本語母語話者や韓国語を母語とする日本語学習者の意味構造とどのように異なっているか、非計量的多次元尺度解析を用いて実証的に明らかにした結果を紹介するものである。

【キーワード】

認知言語学、第二言語習得、日本語教育、格助詞、使用基盤モデル (usage-based model)

1. はじめに

本講演は、中国語を母語とする日本語学習者 (CJL) の格助詞ヲ、二、デの意味構造が日本語母語話者 (JNS) や韓国語を母語とする日本語学習者 (KJL) の意味構造とどのように異なっているか、実証的に明らかにした結果を紹介するものである。なお、分析にあたっては、JNS、KJL、CJLの被験者に対し、格助詞ヲ、二、デが用いられている文をカテゴリー化してもらい、得られたデータをもとに類似性行列を作成し、SPSS (Ver.10) を用いて非計量的多次元尺度解析を行った。多次元尺度解析は、何らかの類似性のデータに基づいて、項目間のつながりを多次元空間内の距離の遠近によって示す手法で、複雑な意味構造を、客観的な数量的尺度によってとらえやすく表示するという点で、語の意味構造を探り出すのに適した分析手法である。なお、詳しい調査方法、結果、考察については紙面の制約上説明ができないため、森山 (2008a、2008b) をご参照いただきたい。

2. 格助詞ヲの意味構造と習得

用いられた例文は以下の15種である。

1. 子供をなぐる。【対格】
2. 家を建てる。【対格】
3. 本を貸す。【対格】
4. 母を恋しがる。【対格】
5. 駅を出る。【起点】
6. 故郷を去る。【起点】
7. 大学を卒業する。【起点】
8. 橋を通過する。【経路】
9. 空を飛ぶ。【経路】
10. 道を渡る。【経路】
11. 思春期を経て大人になる。【時】
12. 4年間を過ごした。【時】
13. 水を凍らせる。【対格 (使役)】
14. 選手を走らす。【対格 (使役)】
15. 雨の中を行く。【状況】

2.1 JNSのヲのカテゴリー構造

JNSのデータを統計処理した結果が図1である。図1を見ると、ヲのカテゴリーは「対格」、「場所」、「状況」、「時」の4つに分かれている。但し⑦の「起点」用法が「場所」のカテゴリーから外れ、「時」のカテゴリーに近づいているが、これは⑦が場所の起点としての意味と時の起点としての意味を兼ね備えているためであると思われる。

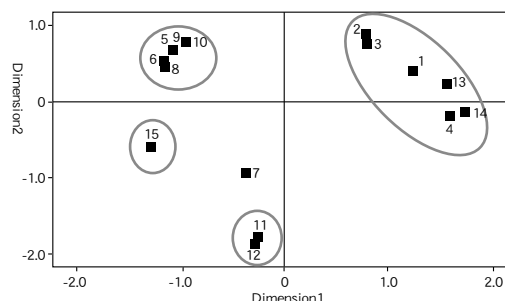


図1 JNSの格助詞ヲの多次元尺度解析結果

2.2 KJLのヲの 카테고리 構造

図2を見ると、「対格」、「場所」、「時」の用法がまとまりをなしている。但し「状況」用法は「場所」用法に吸収されてしまっている。その結果、「対格」、「場所・状況」、「時」という3つのカテゴリーに区別されている。

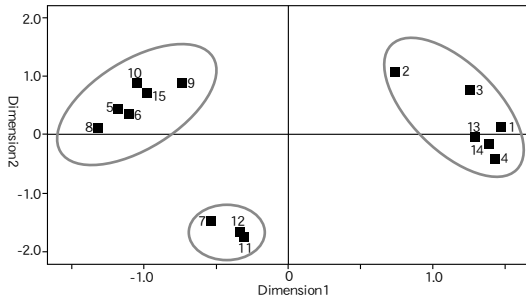


図2 KJLの格助詞ヲの多次元尺度解析結果

2.3 CJLのヲの 카테고리 構造

図3を見ると、「場所」が「経路」と「起点」に別れ、「状況」は「経路」に吸収されている。その結果、「対格」、「経路・状況」、「起点」、「時」という4つのカテゴリーに区別されている。

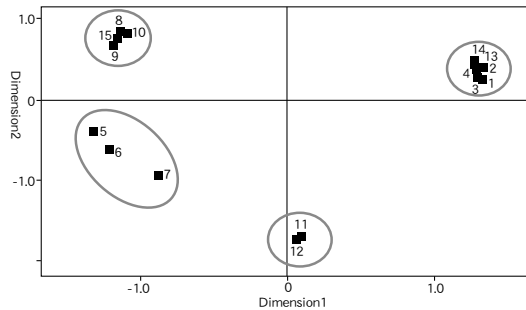


図3 CJLの格助詞ヲの多次元尺度解析結果

2.4 JNSと学習者の意味構造の比較

ヲのカテゴリ区分は、母語話者だけではなく、学習者においてもその境界が比較的はっきりしており、区別はそれほど難しくないようである。しかし細かく見ていくと、JNSでは「対格」、「場所（起点・経路）」、「状況」、「時」の4つのカテゴリーに分かれていたが、KJLでは、「対格」、「場所・状況」、「時」の3つのカテゴリー、CJLでは、「対格」、「起点」、「経路・状況」、「時」の4つのカテゴリーに分かれており、JNSのカテゴリとはやや異なっていた。JNSと学習者との違い、KJLとCJLとの違いに母語の影響があるのかは、これだけではわからない。今後の課題としたい。

3. 格助詞二の意味構造と習得

用いられた例文は以下の20種である。

1. 太郎が次郎にボールを投げた。【動作の相手】
2. 先生がゴミ箱にゴミを捨てた。【移動先】
3. 昨日、友だちはかつてのBFに会った。
【動作の相手】
4. 兄は仕事で東京に行った。【移動先】
5. 社長は今、食事に出ています。【目的】
6. 祖母は病気に苦しんでいる。【原因】
7. 氷が水になった。【変化の結果】
8. 母親は娘に牛乳を飲ませた。【使役の相手】
9. 夫を亡くした洋子は長女に働かせた。
【使役の相手】
10. 花子は真一に花束をもらった。【授与主】
11. 警官は男に殴られた。【動作主】
12. 庭に小さな池がある。【存在の位置】
13. 父は今、旅行会社に勤めている。【存在の所属】
14. 彼は毎朝8時に起きる。【時間】
15. 私の学校は海岸に近い。【空間的基点】
16. この素材は熱にとっても強い。【抽象的基点】
17. 彼女に孫が1人いる。【所有主】
18. 私に富士山が見える。【知覚主】
19. 彼にピアノが弾けるはずがない。【能力主】
20. その学生にはその一言がとてもうれしかった。
【感情主】

3.1 JNSの二のカテゴリ 構造

図4を見ると、JNSは「人／場所」、「プロセス／存在」という2つの基準で「移動先」、「動作の相手」、「存在の位置」、「経験主」という4つの下位カテゴリーに分けていることがわかる。

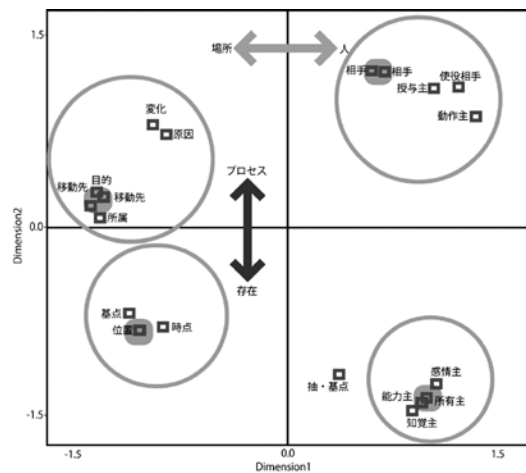


図4 JNSの格助詞二の多次元尺度解析結果

3.2 KJLの二の 카테고리 構造

図5を見ると、JNS同様、KJLの場合も「移動先」、「動作の相手」、「存在の位置」、「経験主」の4つの下位カテゴリーに分かれている。しかし、その下位カテゴリーがJNSのそれに比べるとやや拡散的で、隣のカテゴリーとの距離が短い。このことは、それぞれの下位カテゴリーが確立されておらず、かつカテゴリー間の境界も明確になっていないことを意味している。

一点、JNSと大きく異なるのは、「変化の結果」が、「存在の位置」に区分されていることである。日本語では、「変化の結果」が移動のメタファーでとらえられているため、「移動先」の拡張と考えることができるが、これに相当する韓国語では、(1)のように、そのような移動のメタファーでなく、むしろ「～が成る」と「事態の成立」として、「存在の位置」に近いものと考えられたのであろう。これは日韓両語の違いが反映したものとして注目してよいであろう。

(1) 물이 얼음이 되었다 (水が氷が成った)

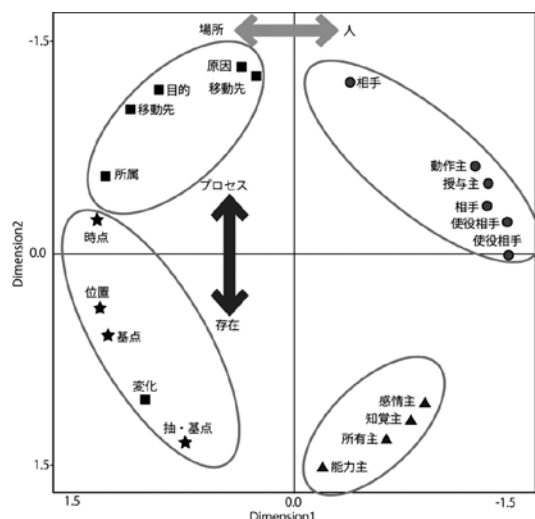


図5 KJLの格助詞ニの多次元尺度解析結果

3.3 CJLの二の 카테고리 構造

図6を見るとやはり4つのクラスに分かれているがJNSのそれに比べるとKJL同様、やはりやや拡散的で、隣の下位カテゴリーとの距離が短い。このことは、KJL同様、それぞれの下位カテゴリーが確立されておらず、かつカテゴリー間の境界も明確になっていないことを意味している。また「原因」用法が「存在の位置」のカテゴリーに含まれている点が異なっている。これには母語の影響が考えられる。

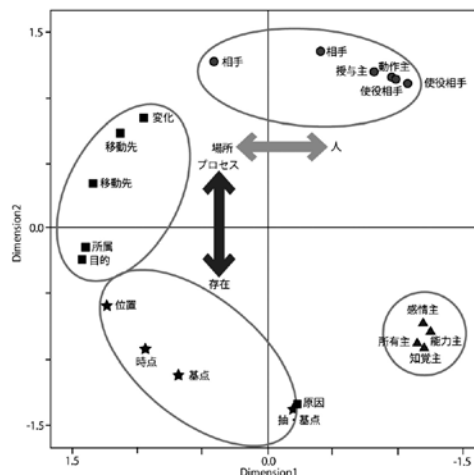


図6 CJLの格助詞ニの多次元尺度解析結果

3.4 JNSと学習者の 카테고리 構造の比較

KJL、CJLいずれもJNSに比べるとカテゴリーが確立されていない。またKJL、CJLそれぞれにおいて母語の影響と思われる部分のあることがわかった。

4. 格助詞デの意味構造と習得

用いられた例文は以下の19種である。

1. 2004年のオリンピックはアテネで開かれる。【場所：場所】
2. 彼は社会主義の環境でそだちました。【場所：場】
3. 彼はこのクラスで一番背が高いです。【場所：範囲】
4. その事件は警察でしらべています。【場所：動作主】
5. 食事のあとで、勉強をします。【時間：時間】
6. 成長の過程で時々見られる現象です。【時間：期間】
7. 長かった夏休みも明日で終わりです。【時間：時限定】
8. 日本人ははしでごはんを食べる。【道具：道具】
9. 毎日地下鉄で学校へ来ます。【道具：手段】
10. このつくえは木でできています。【道具：材料】
11. 病気で学校を休みます。【原因：原因】
12. 彼のアイデアはその点でももしろいと思います。【原因：理由】
13. テストの結果でクラスを決めようと思います。【原因：根拠】
14. 出張で大阪へ行ってきました。【原因：目的・動機】

15. 日本の文化というテーマで論文を書きました。
【原因：要素】
16. タゴはんは自分で作って食べます。【様態1】
17. 夜遅いので小さな音で音楽を聞きました。
【様態2】
18. 時速200キロのスピードで走っています。
【様態3】
19. このへやは30人でいっぱいになります。
【様態：数量限定】

4.1 JNSのデのカテゴリー構造

図7を見るとデの意味・用法は大まかに〈場所〉、〈道具〉、〈原因〉、〈様態〉、〈時間〉という5つの下位カテゴリーに分かれている。

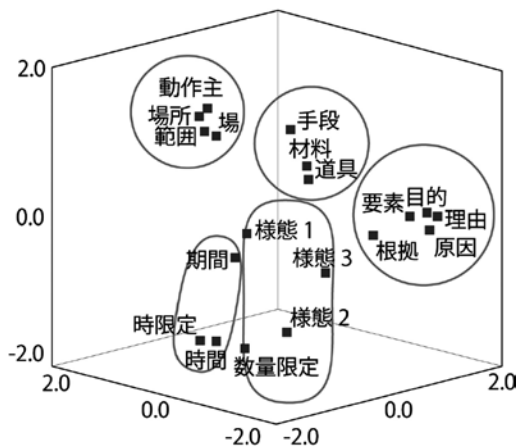


図7 JNSの格助詞デの多次元尺度解析結果

4.2 KJLのデのカテゴリー構造

図8を見ると、KJLでは〈場所〉用法は確立しているものの、その他の用法は日本語母語話者に比べると1つ1つのカテゴリーが確立されておらず、まとまりにも欠けている。また各カテゴリーの非プロトタイプの用法はプロトタイプの用法からかなり離れたところにあり（〈道具〉⑩、〈原因〉⑭）、プロトタイプの用法からの拡張とカテゴリー化がうまくなされていない。

4.3 CJLのデのカテゴリー構造

図9を見ると、CJLではKJLとは異なり〈道具〉用法は確立しているものの、その他の用法は日本語母語話者に比べると1つ1つのカテゴリーが確立されておらず、まとまりにも欠けている。

また「過程で」を「場所」にカテゴリー化するなど、デ格名詞の（表面的な）意味などに影響を受けていた。さらに各カテゴリーの非プロトタイプの用法はプ

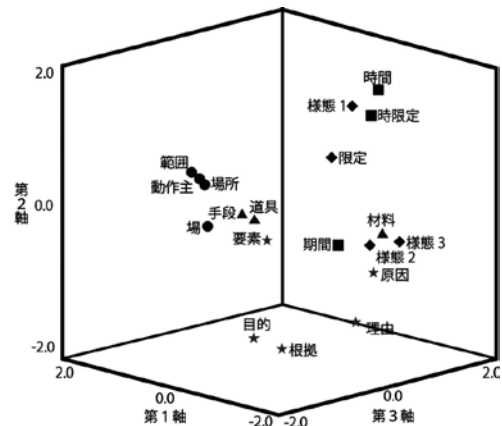


図8 KJLの格助詞デの多次元尺度解析結果

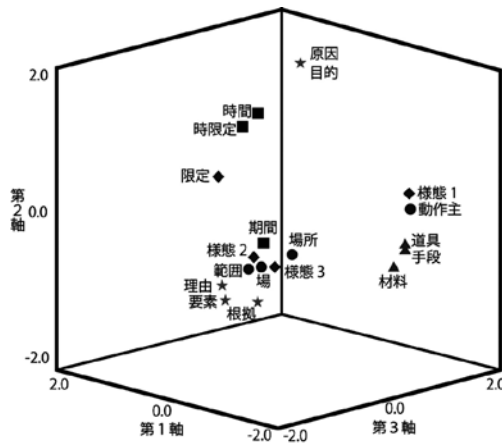


図9 CJLの格助詞デの多次元尺度解析結果

ロトタイプの用法からかなり離れたところにあたり（〈場所〉④など）、カテゴリーとしてまとまりがなかったり（〈原因〉など）、プロトタイプの用法からの拡張とカテゴリー化がうまくなされていない。

4.4 JNSと学習者のカテゴリー構造の比較

KJL、CJLのデのカテゴリー構造がどのように形成されているかをまとめると次のようになる。

- ① どちらも、カテゴリー形成が発達途上（中間言語）である。KJLでは〈場所〉、CJLでは〈道具〉の用法はかなり確立しているものの、その他の用法はまだ十分に確立されておらず、また、その意味構造がJNSとは異なっていた。
- ② 学習者の構造はJNSのようにカテゴリーとしてまとまっていない。

KJLとCJLのカテゴリー構造を比べると、いくつかの違いが見られた。第一にカテゴリー形成の進展はCJLよりもKJLのほうが進んでいた。これは韓国語に

は日本語と同様、格助詞を有するが、中国語には格助詞がなく、習得が難しいことが原因であるかもしれない。しかし、今回のKJLとCJLの学習レベルが同じである保証はなく、これだけでは判断がつかない。第二に、KJLでは〈場所〉、CJLでは〈道具〉の習得が他の用法に比べて進んでおり、KJLとCJLの間にはカテゴリー化に若干の違いが見られた。しかしながらこれが母語の影響なのか、それとも教え方の影響なのか、今の段階では何とも言い難い。

5. おわりに

以上、CJLのデのカテゴリー構造をJNSやKJLのそれと比較して分析した。CJLのカテゴリー構造はKJL同様、発達途上である点では共通であるが、一部に母語の影響と思われる部分があり、その点で差異が見受けられた。

これまで認知言語学は使用を基盤とした言語観を有しながら、内省に頼りがちで、コーパスなどの言語使用データをあまり用いてこなかった。本講演のような実証的研究を補足することで、今後、認知言語学の研究成果

が習得や教育へ応用されていくことを期待したい。

参考文献

- 森山新(2005)「認知言語学的観点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程」(科学研究費基盤研究(C)(2)課題番号14510615 研究代表者：森山新)
- 森山新(2006)「認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究1年次報告書」(科学研究費基盤研究(C)課題番号17520253 研究代表者：森山新)
- 森山新(2007)「認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究1年次報告書」(科学研究費基盤研究(C)課題番号17520253 研究代表者：森山新)
- 森山新(2008a)「日本語の習得・教育研究への認知言語学の応用可能性」(本報告書掲載)
- 森山新(2008b)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために—』ひつじ書房

* 森山の科研報告書は以下からダウンロードが可能
(<http://jsl.li.ocha.ac.jp/morishin1003/>)

もりやま しん／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
moriyama.shin@ocha.ac.jp